

序章

コロンビアの概要

本論に入る前に、コロンビアをよくご存じない読者の皆さんがこの本の内容を理解する上で参考となると思われるコロンビアの概要について、記述することとしたい。

一 人口、民族、地勢、歴史など

コロンビアは、南アメリカの北端に位置し、北はカリブ海、西は太平洋に面している海洋国家である。カリブ海側に一六〇〇キロメートル、太平洋側に一三〇〇キロメートルの長い海岸線を持っている。東はベネズエラ、ブラジルと、南はエクアドル、ペルーと国境を接している。南米の国で、太平洋と大西洋の両方に面しているのは、コロンビアのみである。島嶼を除くと北緯一二度と南緯四度の間にあり、国土の南部を赤道が横断している（図1参照）。

面積は、一一三万八九一四平方キロメートルで日本の三倍強あり、また、国土のほぼ中央部をアンデス山脈が南北に走っている（図2参照）。アンデス山脈は、東部山系、中央山系および西部山系に分岐し、標高三〇〇〇〜五〇〇〇メートル級の山が北のカリブ海か

ら南部のエクアドル国境まで連なっている。また、東部山系と中央山系との間を南米大陸第四の大河であるマグダレナ河が、中央山系と西部山系との間をカウカ河が南から北に流れており、この山脈と大河が国土を東西に分断している。この三つの山系のなかにコロンビアの三大都市であるボゴタ首都特別市（約七〇〇万人）、メデジン市（約二三〇万人）、カリ市（約二二〇万人）が存在する（図2参照）。国土の約四〇％が高原地帯を含む山岳地帯、約六〇％が平原および森林地帯となっている。カリブ海沿岸には、バランキージャ市（約一一八万人）、カルタヘナ市（約九三万人）、サンタマルタ市（約三九万人）という港湾都市が点在する。これらの港は、コロンビアの内陸で産出した金の積出港として古くから栄え



図1 コロンビアの位置



図2 コロンビアの地形

たが、とくにカルタヘナ市は金の集積・保管地として、都市全体が海賊やイギリス海軍の襲撃を防ぐため城壁で囲まれており、現在世界遺産に指定されている。

気候は、カリブ海沿岸および太平洋沿岸、カリブ海とボゴタなど内陸都市とをつなぐ主要交通ルートであるマグダレナ河の流域、東部山系の東側に広がるジャノス平原ならびに南部の熱帯雨林地帯は、熱帯性気候で高温多湿であり、一方、アンデス山系は高原性の気候で、三大都市の存在する高度二〇〇〇メートルから三〇〇〇メートルの地帯は涼しく「常春」と呼ばれている。高地に主要な都市が発展したのは、赤道直下でも蚊がいないため、マラリア、デング熱、黄熱病などの熱帯



マグダレナ川下流域の低湿地帯と後方のアンデス東部山系

病にかかりにくいという健康上の理由からである。コロンビアの国花は蘭である。

人口は、約四六〇〇万人で南米ではブラジルに次ぐ規模である。その約八〇%がアンデス山系の高原地帯に住んでいる。人種構成は、白人と先住民の混血であるメステイソが五八%、白人二〇%、白人と黒人の混血であるムラートが一四%、黒人四%、黒人と先住民の混血であるサンボが三%、先住民一%と多様である。

コロンビアの歴史を簡略に辿ると、スペイン人が到来するまでは、インカ文明の影響下にあったチブチャ (Chibcha) 語族を中心とする先住民が居住していた。多くの部族のなかで代表的部族は、カリブ海沿岸に居住していたタイロン族とボゴタを中心に広く居住していたムイスカ族である。

現在のコロンビア領土にはじめて上陸したスペイン人は、コロンブスの第二回航海に参加したアロンソ・デ・オヘダ (Alonso de Ojeda) で、一五〇〇年にカリブ海沿岸のグアヒラ半島に到着し、一五二六年サンタマルタに最初の植民地を建設した。このコロンビアの先住民にとっては征服者であるスペイン人の目的は、専ら黄金を求めることであった。スペイン人たちは、コロンビアの内陸部にエル・ドラード (黄金郷) 伝説があることを知り、一五三六年四月、ゴンサロ・ヒメネス・デ・ケサーダ (Gonzalo Jiménez de Quesada) を

隊長とする探検隊を内陸の高原地帯に向け派遣する。この探検隊は、マグダレナ河を苦勞して遡り、一五三七年三月、ムイスカ族の住むボゴタ高地に到着した。ヒメネス・デ・ケサーダは、ムイスカ族の内紛を利用して支配権を獲得し、一五三八年にボゴタ植民地を建設して、この地域を自分の生まれ故郷であるグラナダに因んでヌエバ・グラナダ（新しいグラナダという意味）と命名した。そして、黄金郷伝説が生まれた場所であるグアタビータ湖に辿り着いた。しかし、同時期に、ベネズエラ側からオリノコ河を遡ってボゴタに到着したドイツ人のニコラス・フェデルマン（Nicolas Federmann）とエクアドル側からボゴタに到着したピサロの部下であるセバスチャン・デ・ベラルカサル（Sebastián de Belalcázar）がグアタビータ湖でヒメネス・デ・ケサーダと遭遇することとなった。どうしてここにドイツ人が登場するのかといえ、スペイン国王は南米の探検資金がなかったため、ベネズエラの開発権をドイツのヴェルザー（Welsch）銀行に譲渡し、これにより同銀行から委託されたフェデルマンが黄金を求めてボゴタ高地にやってきたという訳である。

この戦利品の分捕り合戦は、三者間での争いにはならずスペイン国王の調停に委ねられた。結局、ヌエバ・グラナダは三者のいずれにも与えられず、直前に死亡したサンタマルタの総督の息子に与えられた。

黄金郷伝説

グアタビータ湖は、ボゴタから北に五七キロメートルの地点にあり、海拔約三〇〇〇メートルの高地にある隕石によりできた湖で、発見当時、湖の直径は約四〇〇メートル、水深は約一〇〇メートルであったといわれている。

ムイスカ族にとって、この湖は年に二回、父なる太陽と母なる水に感謝の供え物を捧げる聖なる場所であった。この湖には、全身を金粉で飾りつけた祭司（黄金男）が筏に乗り、湖に漕ぎ出して、黄金の腕輪や冠およびエメラルドなどの供え物とともに湖に飛び込むという、エル・ドラードの儀式の伝説があり、湖底には金やエメラルドがたくさん沈んでいると考えられていた。

この宝の山をめぐる人間の欲望の歴史をみると、発見当初から多くの人物が黄金を採取しようと試みたが排水問題が最大の障害となって、あまり大きな成果が得られなかった。

一五六二年にアントニオ・セプルベータは、八年の歳月をかけて先住民を使役

して人力で排水し、約四二メートル水位を下げて一万二〇〇〇ペソ（当時一ペソ＝一ドル）相当の金を採取した。その後、一八二〇年にフランシスコ・デ・パウラ・サンタンデーは一六人の投資家を集めてファンドを作り、排水に挑戦したが成功しなかった。一八二五年、スペイン人の会社が水深を約三〇メートルまで低下させて、一七万ドルの採掘権料を支払うのに十分な金と七万ドル相当のエメラルドを採取した。一八七四年、イギリスとコロンビアの合弁ファンドが挑戦したが、失敗に終わった。一九三二年、米国人が



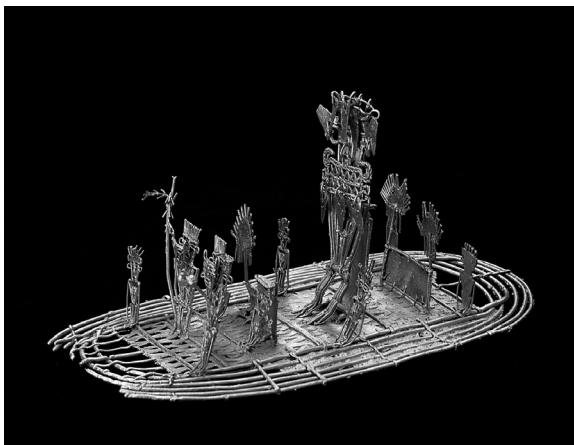
グアタビータ湖。画面中央左が切り崩された部分

現在グアタビータ湖は、人間の欲望による湖岸の破壊という無残な爪跡を残したまま静かに歴史を伝えている。



切り崩された湖岸を地上から見上げる

潜水夫を潜らせて調査し、またイギリスとコロンビアの合弁ファンドが湖岸を爆破する作業を始めたが、政府がそれを禁止した。前頁と上の二枚の写真は爆破によりめぐりとられた湖岸を高台と地上から撮影したものである。



コロンビア共和国銀行黄金博物館所蔵

写真は、一八五六年にシエチャ湖から探し出されたエル・ドラーの儀式の筏細工（黄金製）である。

コロンビアは、他の南米諸国と同じく、一八〇七年にナポレオンがスペインに侵入し自分の兄をスペインの国王に就けたことを契機として生じたスペイン独立戦争中の一八一〇年七月二〇日に独立を宣言した。しかし、ナポレオンの敗北後一八一五年に始まったスペインのレコンキスタ（再征服）により一八一六年ボゴタがスペインの再占領下に入った。パブロ・モリージョ將軍が率いる五〇〇〇人のスペイン軍の独立解放派に対する攻撃は厳しく、一八一六年にボゴタを再占領して以降、スペイン軍によるヌエバ・グラナダの政治家、軍人に対する処刑は三〇〇人を超えたといわれている。最終的に、一八一九年八月七日のボヤカの戦いにおいてシモン・ボリーバル率いる独立解放軍がスペイン軍を破るまでの独立解放戦争による死者数は、一〇万人から一五万人と推定されている。この独立解放戦争の死者数は、当時の人口約一三〇万人の七・七%から一・五%に相当する激甚なものであり、当時の犠牲者がすべて男子であったと仮定し、男子の平均寿命が二五歳（経済学者カルマノヴィッツの推計 *Nueva historia económica de Colombia*, 2010, p.75）であった社会を前提とすると、概ね一五歳以上の銃を持った男性の二人に一人の割合で戦死したという計算になる。これは、コロンビアの歴史上最大の犠牲者割合である。シモン・ボリーバル率いる独立解放軍が一八一九年八月七日のボヤカの戦いにおいてスペイン軍を破り、ようや

く真の独立が達成された。

コロンビアの国旗は、上半分が黄色、下半分が青と赤の帯状に区分された三色旗である。黄色は黄金を連想させ、コロンビアの富を象徴し、青は美しい自然の空と海を象徴し、赤は独立解放のためにコロンビア国民が流した血すなわち愛国心を象徴すると説明されている。

二 地理的条件、人口の動態と社会経済構造

コロンビアのビオレンシアという歴史的事象を理解するためには、まずその地理的条件、人口の動態および社会経済構造を十分に認識しておくことが不可欠である。

コロンビアの国土については、既に述べたとおり三本のアンデス山系と二本の大河が南北を縦断しており、国土は、太平洋沿岸部、カリブ海沿岸部、アンデス山脈の東側に広がるジャノス平原、南部の熱帯雨林地帯とアンデス山脈の内部の五つの地域に分かれ

る。従つて、ベネズエラ側の東から太平洋沿岸に国土を横断しようとすれば、熱帯から高度三五〇〇メートル級の雪山を越え、マグダレナ河の海拔レベルの熱帯に降り、再び高度三〇〇〇メートルから四〇〇〇メートル級の中央山系を越え、再びカウカ河流域まで降りて三度高度三〇〇〇メートル級の西部山系を越え、熱帯の太平洋沿岸に降りる必要がある。このような地形により、国土は地域的に分断されており、交通手段の未発達とあわせて中央政府の統制が効かない時代が最近まで続いた。これが、伝統的に地方の自立性が強いという特徴^(注)をもたしている。

(注) 中央政府の統制が効かないなかで、一九世紀の前半以降、二大政党制下の政党のみが全国的組織を持ち、中央政府に代わる機能を有した。この政党が果たした大きな役割についてピオレンシアを理解するために十分に認識しておく必要がある。

次に、人口は、スペインがコロンビアに入植した当時(一六世紀はじめ)は、インディオ(先住民)が約六〇〇万人いたと推計されているが、スペイン人が持ち込んだのはしか、天然痘、インフルエンザ、チフスなどの病気により、一六〇〇年には五〇万人程度までに激減している。一七七八年の人口調査によれば、人口は約七九万人で、白人二〇万人、インディオ一六万人、混血(メスティソ、サンボ、ムラートの合計)三七万人、奴隷(黒人)七万人となつ

表1 1778年の人口調査

(単位: 1000人、%)

地域	白人	インディオ	混血	奴隷	合計	構成割合
カリブ海沿岸	18.8	28.6	100.9	14.1	162.3	20.5
アンデス山系	182.4	107.5	256.4	41.2	587.4	74.1
うち ボゴタ	(25.3)	(31.6)	(30.2)	(1.2)	(88.3)	(11.1)
ポバヤン	(20.9)	(27.3)	(30.8)	(18.7)	(97.7)	(12.3)
メデジン	(7.9)	(2.1)	(27.5)	(8.9)	(46.5)	(5.9)
太平洋沿岸	0.8	6.7	7.3	7.2	22.0	2.8
ジャノス平原	1.6	15.2	4.0	0.1	20.9	2.6
合計	203.5	155.2	368.6	65.2	792.6	100
構成割合	25.7	19.6	46.5	8.2	100	

出所:Salomón Kalmanovitz, Nueva historia económica de Colombia, 2010, p.43

ている(表1参照)。

表2は、コロンビアの人口の推移と人口の伸び率(年率)を国勢調査の結果に従って示したものである。これによれば、一九世紀の人口は、約一〇〇万人(一八〇〇年)から約四〇〇万人(一九〇〇年)と約四倍に増加しているものの、その人口規模は極めて小さい。ちなみに、日本の歴史で見ると、大宝律令、大化の改新の頃(七世紀中頃)の人口が約四五〇万人と推計(亀頭宏『人口から読む日本の歴史』講談社学術文庫)されているので、それよりも少ない人口であったことになる。かつ、表1の地域別人口で明らかのように、アンデス山脈の高原地帯に人口の四分の三が住んでおり、沿岸部およびジャノス平原の人口は全く過疎状態にあった。

また、表1のアンデス山系のなかの都市の人口を見ても明らかなおり、古くから首都ボゴタが他の地方都市

序 章

表2 コロンビアの人口の推移

(単位：1000人、%)

調査年	合計	男子	女子	伸び率(年率)
1778	792.7			1
1825	1,299.3	600.7	628.5	
1835	1,686.0	875.7	809.8	
1843	1,931.3	924.5	1,007.2	1.9
1851	2,243.7	1,088.6	1,155.1	1.7
1870	2,916.7	1,420.8	1,495.9	1.4
1905	4,533.8			
1912	5,072.6	2,324.5	2,509.8	1.4
1918	5,855.1	2,749.4	3,105.7	2.2
1938	8,697.0	4,310.2	4,386.9	2.0
1951	11,548.2	5,742.1	5,806.1	2.2
1964	17,484.5	8,614.7	8,869.9	3.2
1973	20,785.2	10,242.7	10,542.5	3.0
1985	27,837.9	13,777.7	14,060.2	2.3
1993	33,109.8	16,296.5	16,813.3	2.2
2005	42,090.5	20,891.6	21,198.9	1.8
(2009)	(46,000.0)			

出所：DANE, David Bushnell, Colombia; Una nación a pesar de sí misma, 2007, p.443

(注) 男子と女子の計が合計と一致しない場合があるのは、軍隊の兵士を含まない調査年があるためである。

と比べて明らかに優位な地位を占めていたわけではなく、二〇世紀に入ってからメデジンやバランキージャなどの都市と大差がなかった。これが、地形の要因に加えて、地方の独立性を高めて地域間の対立を激しくしたひとつの要因である。

一方、人口の急激な増加（一九世紀中四倍、二〇世紀中一〇倍強）により、高原地帯からジャノス平原、マグダレナ河流域などの低地や国境地帯への人口の移動が二〇世紀末まで続いた。さいわい、二〇世紀前半ま

では、アンデス山系に所在する伝統的農場を除き、コロンビアの可耕地の大部分は未開墾地であり、増加した人口を養うための土地は十分に存在した。従って、農業の歴史は土地の占有と取得をめぐる周辺部に向けて展開した。とくに一九世紀後半から二〇世紀はじめのコーヒーブームの時期に、問題が多発した。零細農民は、所有権登記などの制度が十分整備されていないなかで、土地紛争や訴訟に巻き込まれ、国家権力とくに秩序維持のための軍隊と警察の不在（二〇〇一年時点でも、約二割の市町村に警察署がなかった）のなかで武力による自力救済に走り、これがビオレンシアに発展する原因となった。^(注)一九世紀末の農業従事者の割合が約七割であったことを考慮すると、農業のフロンティアの拡大の過程が、コロンビアに特有のビオレンシアと重要な因果関係にあったことを理解することができる。

（注）サンタンデル大統領により共和制の基礎が確立した一八三二年から、ヌニェス大統領により中央集権的な憲法が制定される一八八六年までの間、コロンビアは外国からの侵略を経験しなかったこともあり、軍隊の兵士数が三五〇〇人を超えたことはなかった。また、国家警察が創設されたのは、一八八六年憲法制定後ヌニェス政権においてである。

ラ・ビオレンシア終息後の一九六〇年の農地の保有状況を見ると、二〇ヘクタール未満

の農地の所有者が八六%で、全農地面積の一五%を占めている。これらの小規模農業者が、バナナやジャガイモなどの食糧を生産し、大土地所有者は、綿花、サトウキビ、米の生産や牧畜業を営んだ。コーヒーの生産農家は、家族経営が中心で、一・五ヘクタールから二ヘクタール程度の規模であった。

さらに、農村の社会構造は、大土地所有者がパトロンとなり多数の小規模自作農民や小作農民をクライアアントとして面倒を見る郷党的親分—子分関係 (*clientelismo*) が存在し、この身分的關係が農村共同体を支配した。ボスが属す政党にすべての子分が従属するという関係は、ボスへの忠誠が党



日本へ輸出するカーネーションの出荷作業

組織への忠誠に置き換わるといふ形となり、地方において政治的なバイオレンシアが生じる原因となった。この構造は、地方において農民はボスの所有物のように考えられ、市民社会の発展を阻害する作用を果たした。フランスのクロンビア学者であるダニエル・ペコーは、この農村社会構造は、バイオレンシアにも、また逆に社会の安定にも両方に作用するものであったと分析している (IAS FARC 2008, p.17)。